

〔座談会〕

## 国際交流の意義とこれからの 展望

樋口 秀雄 (大学言語文化教育研究センター所長)

森 一郎 (女子中高教頭)

長根 憲一 (高等学校教諭)

坂田 直三 (国際中高教頭)

山口 良子 (中学校教諭)

吉川 康雄 (香里中高教諭)

司会 釜田 泰介 (大学国際センター所長)

釜田 同志社の国際交流はまさに一八六四年の言えば日米間の市民の交流から始まったわけでありませう。

ちょうど百三十年前でありませうが、日米の市民の間で一つの交流が起こった。それは当時の一八六〇年代から七〇年代のアメリカ市民の中に、非常に高い国際的な教育観とか意識があったのではないか。アジアからの一青年を受け入れて、当時としましては最高の教育環境を提供したというようなことは、逆にいま京都で我々にそれをやれと、またやれているかというふうに問われても、なかなか難しいことだと思えます。六四年から七四年までそういうことが起こりまして、そして七五年同志社をつくるわけですが、そのときも当時の、海外伝道というキリスト教のアメリカン・ボードを構成していたアメリカ市民の方々のかなり高い質の、いまで言う国際主義的な考え方というものがあって初めて成り立ったのではないか、もちろん宗教的な団体の理想というようなものもあつたと思うのですが、とにかくアジアの現地教育活動に多大な援助をした。それも資金面だけではなくて、人的にもたくさんの人を派遣して支え

た。いまの田辺校地の大学の図書館と体育館に名前がつけましたディヴィス博士とかラーネッド博士なども、当時たいへん若い時代に派遣されてきたという、同志社はスタートから不思議な形の交流がアメリカと日本の市民の間でなされているわけです。

それだけでなく、これが受け入れられた京都の地でも、また当時の日本国内のかなり遠った地域に育った人々が一緒に共同作業をやって同志社をスタートさせたというようなことが確認できるわけでありませう。今日のことばを使うなら異文化コミュニケーションの実験場としての同志社の誕生と言えるのではないのでしょうか。当時のちょうど一八七〇年代の日本という国自体の国際化政策だったのかも知れませんが、それだけでは説明のできない不思議なものを感じるわけです。これが同志社の国際交流を語るときの最初の山のよきな感じを受けているわけでありませう。

第二の山は、私の感じでは、第一次大戦後、一九一九年から二〇年代の初頭にかけて、これは今度は日米間というよりは世界的に高まった国際主義、国際協調主義の流れの下で起るわけです。アーモスト大学でもそれがかな

り高まり、そして同志社でもそれが高まった結果、日米間の学生交流が始まるわけでありませう。海老名弾正のアーモスト大学での演説、それが契機と言われている一九二二年の初代学生代表ニコルズ氏の来学となるわけです。この学生交流の始まりに、ミルクジョン・ア

大総長が関係していたことも同志社人は今一度想起すべき点でありませう。アーモスト館の建物がこの学生交流を象徴しているわけでありませう。この交流が例えば先年新島講座で見えにあられましたジョン・ホール博士のようなああいう卓越した日本研究者を結果として生み出すことになったわけですし、また国際主義教育委員会が今年の講師としてお迎えするリンカーン氏もこのような流れをくむ方なのです。

このあとに第三の山とでも言うべき第二次大戦後の交流を迎えるわけでありませう。第二次大戦後には同志社が一八七五年から掲げておりました同志社教育の理念理想というものが普遍性をもったものだということが日本全国的に確認された時期のような印象を受けております。

そういう中で実際には世界は冷戦期に入っ

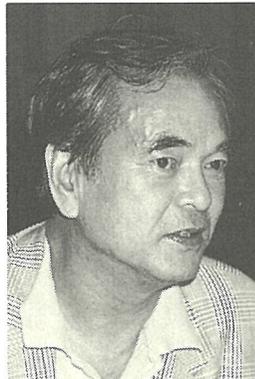
ていきますので、今度は冷戦下での国際交流というようなこと、いままでに体験しなかつたことを体験しだすわけでありませう。カールトン大学生代表が同志社に着任したのは一九五三年ですが、これには一九四九年以降の中国の国内事情が関係していたわけです。ちょうどこの新島会館にありましたカールトンハウスにおいてこの学生代表と同志社の女子学生を中心とする交流が始まり、これが後に一九七〇年代のAKPへと発展してゆくわけでありませう。五〇年代、六〇年代はカールトンハウス、ハワイ寮、アーモスト館、岩倉のキング寮、神学部この春寮などにおいて、学生を中心とする盛んな国際交流が展開された時期でした。これらは学生の交流であります、時期はほぼ同じくして国際的な学術交流が同志社を中心にして始まるわけです。これが一九五一年から始まる京都アメリカン・スタディーズの夏季セミナーのスタートであります。このセミナーは京都大学との共催の形をとりながら一九八七年まで三六年間続き、その間に日米を中心にアジア諸国の研究をも交えた形での学術交流がなされ、日本とアジア諸国の学号に大きな影響を与えたわけです。この学



長根憲一氏



森 一郎氏



樋口秀雄氏

術交流の延長線上に大学院アメリカ研究科が誕生し、現在、日本の広い地域からだけでなくアメリカ、ロシア、中国からも前途有望な学生諸君を迎えて研究上の交流がなされているところでもあります。このような太平洋を中心とする交流の流れの中で一九七〇年代に入ると法学部にEC資料センターが開設され、ヨーロッパとの交流が始まる。そして冷戦が終つたまったく新しい時代九〇年代を迎えたわけがあります。一九九三年にはドイツのチュービンゲンの日本研究センターができることになり、ヨーロッパとの交流にもかなり力を入れ出したところということでしょうか。

ざっとたいへん狭い、しかも自分の関心事だけから同志社の国際交流を振り返ってみますと、百三十年の間にはいろいろな節目といえますか、山があつて、そして谷といえますか、日本社会全体の中ではあまり広く支持を得られなかったような時代というものもあつたように思うわけがあります。そういう中で、同志社の教育方針が変わつたかといえますと、一貫して同じ教育方針というものを維持しつつ生きてきたわけでありますから、国際交流を語れと言われると、同志社の場合には、

自分の学校の歩みをつい振り返つて語るといふような、そういう感じになつてしまうわけがあります。

ですから、きょうの「展望を語れ」ということはこの一三〇年間の交流史に立脚して今後、九〇年代から二十一世紀にかけての何かを語れということだと思つておりますが、たいへん大ざっぱなことを申し上げたわけがあります、どうぞリラックスなさつていただきますして、ご自由にお話をいただきたいと思います。

私がスタートをこんなふうにしてしまったことがもしお話しなさる上で障害になるようございましたら、全部忘れていただいて、ゼロからお話しただいたほうがいいと思つます。私としては、司会をやれと言われ、なんか最初に言わないといけないうのかなというだけの気持で言ったこと(笑)、何も規制するつもりも何の方針も柱も立てておりませんので、どうぞご自由に、どのような問題、角度からでもご発言をお願い申し上げます。樋口先生、何かちよつと口火を切つていただかないと前へ進みませんのでお願いいたします。



吉川康雄氏



山口良子氏



坂田直三氏

### 同志社の国際交流史

樋口 まあなんか言わないといけないわけ(笑)。いま釜田先生がおっしゃいました話

は、同志社の国際交流というものの中身を端的に表現しておりますが、日米間の、あるいは同志社とアメリカとの交流という形でそれが出てきているわけです。けれども、そのアメリカと日本以外の関係というものが比較的無視されてきたといえます。あるいは実際にあったのだからいいけれども、それが歴史にあまり残っていないわけです。たとえば第二次世界大戦後の四〇年代、五〇年代ごろでしょうか、戦時賠償によるインドネシアの留学生がかなりおりました。ああいう人達の追跡調査なんていうのはどうなっているのか聞いたこともないし、もともと当時来ていた学生たちというのは政府高官の子弟で、一般から募集したものじゃないというふうなことを聞いてはおりましたけれども、かなりの数の学生がとくにインドネシアから来ておりましたね。あれが国際交流と言えるかどうか、むしろ一方的に配分されたのでしょうか

れども、これからの展望ということを考えれば、あの人たちの追跡をして、どうなっているのだろうかというようなこともおもしろい、とくにアジアに目を向けるという意味ではおもしろいんじゃないかと思うのです。

それで、さつき釜田先生のお話を聞いていて、私もそのとおりだと思うのですが、ぼくはいつも言うのは、我々にとって国際交流というのは日米交流であって、ちょうど我々の育った環境、我々の年齢の者はとくにアメリカに対する羨望というのでしょうか、そういうものが非常に強くて、あれも追いつけこれも追いつけという、あるいは学び取れという主張が全面でした。学び取れという主張を今後も生かしていくとすれば、これはアジアに目を向けるということはほとんどないんじゃないかと思うんです。そうだとすると、学び取れじゃなくて与えるという、いま迄のアメリカと日本の関係が逆転した形のものが必要じゃないかなという、先走って展望ということ言えば、そういうふうには思うんですけどね。

釜田 いかがですか。樋口先生がおっしゃったアメリカ以外の交流、同志社の記録の



釜田泰介氏

上では確かにあんまり残っていないですね。その国際主義というものは、実は同志社が掲げてきた国際主義と、同志社が百三十年前に同じくもつと広いものであったろうし、とくに一九二〇年代のアーモスト大学の教育方針とか、第一次大戦後に起こった運動なんかを見てみますと、かなり違いますよね、広い視点をもっています。それからいまのAKPのこういう教育構想なんかを見ましても、けっして日本一国を対象にしたプログラムではなくて、世界の中の一地点として京都へ来ていますね。アメリカの場合の教育方針はかなり広いものがある、いろいろな文化を研究する中の一文化に対する研究という視点がある、その日本研究にはあるんですけど、確

に樋口先生がおっしゃった日本の場合の国際交流というのは、そこまでの広い視野があるのか、かつてあったのか、本当に文化現象としてそういう他文化を客観的に研究し、というように視点があり出てこないような感じを受けますね。

もう一つ、ヨーロッパでいまのEUがずっと統合してきた過程で、一九八七年でしたか、エラスムス計画というものが採択されました。あのエラスムスの名前をとったのですが、要するに内容は学生交流をもつと密にするというようなことですね。読んでみますと、エラスムスの時代にはもつとヨーロッパの中ではこういう交流が密に行われていた。当時の若者はもつと他文化というものに接する機会も多かったし、よくそれを理解していた。ところが、進歩したはずの二十世紀になって振り返ってみたら、国境線の中で教育をし合っていて、あまりほかへ出かけていって、ほかの国の大学で勉強するということがなくなくなってきたというところに気がついて、それで奨学金を出して学生を派遣し合っ

てあります。ああいうものを見てみましても、それからアメリカのそれ以前のほとんど学生を他の国なり、大学へ一年なり滞在させてやっていくというのは、樋口先生がおっしゃったような日本よりはなんかもつと広い教育観があつてのような印象を私は強く受けるのです。

同志社についても、私はときどき自分で不思議に思うことがあるのですが、アメリカ以外との交流で特にアジアとの交流を考えてみますと、戦前の同志社はアジア、特に中国と当時の朝鮮半島からも留学生をたくさん迎えているのです。大学の規模はものすごく小さいのですが、そのときここで勉強して帰っていった留学生の同志社に対する印象、思い出などを読んでみますと、いまの留学生数も増えて、こちらも国際化、国際化ということで、外へ出る機会も多くなつてはいるのですが、物理的に大きくなつたわりには精神的には同志社は小さくなつてきているような印象をもつときがあるのです。戦前のほうがかなり条件も悪かつたはずですし、規模も小さいし、経済力も小さかつたはずですけど、どうも行った教育はもつと大きかつたのではないか

と。それは当時のアジア諸国からの卒業生の方の回顧談を読んだりしますと、そういうことを感ずることがあるのですよね。

恐らく原田助とか、海老名弾正とか、徳富蘇峯などが考えていた一九二〇年代までの同志社教育というのは、現代のものよりも、もっと骨太のゴツイものだったのじゃないか。

それからもう一つ、私はそういう点で思いますのは、今は休みを使えばどんどん海外へ行ける時代ですよね。それから海外の情報があるものすごく簡単に入手できる時代で、実地体験が簡単にできる時代なのですが、学校へ勤めております教職員も同じことで、どんどんそういうチャンスに恵まれるのですが、このようなチャンスに恵まれ、海外の情勢に精通すること、非常に国際的な本当の意味での国際的精神をもった人材が育つということとは、なんか関係がないような感じが（笑）私はときどきするのです。かえって広がっていったために、チャンスがふえたために小さく育つというようない。

というのは、だいたいいまの企業を中心に海外で活躍してられるO・Bの方々の学生時代を考えてみますと、私自身も含めまして、

海外へ行つたとか、行くチャンスというのはほとんどなかったわけですし、国際的な雰囲気には接したのは、恐らく今出川校地しかないわけですね。その今出川育ちが今日の七〇年代、八〇年代の国際化の波の中で、内外を問わず、国際的な分野で活躍しておられるわけです。それ以降の世代はものすごく恵まれていくわけですね。恵まれているのですが、同じような人材が育つのかどうか。ですから国際交流というのは何か。国際主義教育とかそういうものも語られることになると思うのですが、一体何なのだろうかということを考えさせられるわけですね。

そのようなことも含めまして何かいかがでしょうか。今度は順番をちよつと山口先生に飛びましようか（笑）。

山口 先ほど樋口先生がインドネシアの戦時賠償のことでちよつと言っておられたのですけど、ことし、同志社中学校の三年生の英語部の生徒たちが、マレーシアから南方特別留学生として日本に連れてこられた方のことを英語劇化しました。その人は広島で被爆して、非常にすばらしい方だったのですけれど、帰国の途中で京都で途中下車して京大病院で

亡くなったサイド・オマールさんという人です。一乗寺の円光寺にイスラム式のお墓があつて、本にもなっているのですが、数年前に地元の小学校で、そのお墓がなぜあるのかという地域調査から始まつているんな事やらわかつてきたのです。そのサイド・オマールさんのことが、一九九二年、朝日新聞の「アラ」の八月号に、「戦時下の南方特別留学生」という見出しで南方特別留学生のことやパールハーバーのことなどが、調査された特集記事が載つていたのです。それをもとにいまの中学三年生が英語劇をつくつていっているのですけど、いろんなことを生徒たちも調べていくのですが、クラブ活動だから自主活動ではあるんですけど、いまままでにやつてきた劇とは違つた意欲で取り組んでいます。休みの日、連休や夏休み中にも京都市の中央図書館に行つて、マレーシアの衣装はどんなものか、劇中でどんな踊りをしようかと、そういうことをとても積極的に調べてくるので、ちよつとびつくりしています。

それからサイド・オマールさんの妹さんが現在もお元気で、アザーさんとおつしやるのですけど、六十四歳でマレーシアに健在なの

です。前に「アエラ」の記者の方もアザーさんには会ってられるのです。そのアザーさんに今年の夏同志社出身の土井たか子さんが会われたという記事が、京都新聞に報道されました。その新聞記事を、生徒に英語部ニュースで配ったら、ある生徒のお父さんがアザーさんを知っている、アメリカに留学したときにアザーさんの娘さんと友達だったというふうなことがわかったりして、こんな近くにそんなことがあると思わなかったので（笑）おどろきました。アザーさんの二十年前の写真も見せていただいて、アザーさんからもらったマレーシアの衣装です。これを劇に使ってください」って言ってもってきとてくれて、

だからそんな形でものすごく身近なところでそういうのがあるなっていう気がついたのです。それと実は「アエラ」の特集を編集した記者が烏賀谷弘道さんというんですけど、同志社中高の卒業生で私の教え子だったのです。また、地元の修学院小学校でオマールさんのことを生徒と一緒に調べている先生の中にも、同志社大学の卒業生の方がいたり、サイド・オマールさんのお墓をイスラム式で何とかして建ててあげようと思った人が園部さん

という同志社とかかわりがあった方なんです。私がサイド・オマールさんのことを知ったきっかけは、私の娘がその小学校に地元で行っていたからなんですけども。

私自身も英語の教師でずっとやってきているので、いろんな国際交流をしていきたいと思ってやってきたのですが南方特別留學生のことを最近まで全然知らなかった、そういうことがあったことも知らなかったというのにびっくりしています。それからいま被爆後五十年たつていろんな事実がはつきり表に出てきているということでもいまチャンスでもあるし、本当にそういうことをもつともつと生徒たちも知りたいと思うてくれているなというのを感じています。

それからもう一つは、先ほど韓国の卒業生の同窓会ができてきているのじゃないかっておっしゃってたんですけども、関連があるかどうかちょっとわからないのですが、ちょうど同じ一九四十年代に同志社の英文科に留学していた、戦時下で下鴨署にスパイ容疑で逮捕された尹東柱（ユン・ドンジュ）という詩人がいるのです。そのユン・ドンジュという韓国の詩人の方は、日本で言うところと宮沢賢治みたくに有名ならしいので

す。韓国の子供たちはみんなその詩を暗唱して言うというそれぐらい有名な人らしいのです。その「ユン・ドンジュをしのぶ会」を韓国・朝鮮の同志社の卒業生の同胞でやろうというのが二年前にあつて、それをきっかけにして一年後の去年の四月に国際会議場で同窓会が結成の会をされたように聞いているのです。それと先生のおっしゃったのと関係があるかどうかちょっとわからないんですけど。

釜田 恐らくそうだと思います。私が見せていただいたこういう冊子はなんかそういうものでした。

山口 そのユン・ドンジュは詩人として韓国と朝鮮と両方の方たちにとつてもものすごく心の支えみたいな詩人の方らしいのですけど、彼が同志社大学の英文科で学んで、いまの現神学部のあるあたりに木造の建物があったらしいんですけど、そこで学んでいたということなんです。ただ、スパイ容疑で捕えられたりして、あのころ日本の政府はずいぶん大変なことをしていますので、福岡刑務所で獄死しているのです。それも生体実験だったのじゃないかということがありますが、でもそれほどの有名なすばらしい詩人で、本も出てい

るのに、その方が同志社大学の英文科で学んだということ私は最近まで知らなかった。同志社中高卒業生で、同僚として英語科と一緒に仕事をしていた季珠喜さんという方から教えてもらってはじめて知ったのですけど、日本の普通の歴史では教えてもらえず、同志社の中でかなり長く生活していたのですけど、そういうことを知らなかった。ユン・ドンジュのことも韓国と同志社の関係の中で、ものすごく大事な人じゃないかと思っただけです。だから同胞の方たちのその集まりでは何とかしてユン・ドンジュのレリーフを同志社の学内に残せないか、彼はこう生きたのだということを残せないかということ言つてられたりしているのですけど。

方たちや、ニュージーランドの方がけっこう期待されていると思うのです。日本にそういうことを求めているって感じるし、それから東欧のリトアニアの方とちよつと知り合いなんですけど、その人たちから見ても、日本とか、同志社みたいな大学なんかをあこがれる目で見たらはるといふか、そういうものをいろんなところでお話ししたり、文通したりしてきて育てられた同志社があるとしたら、今度はそのことをできないか。いままでもやつてこられていると思うのですよ、私がいまよりよく知らないだけで。でもそういうのもっともつとオープンに広げていくことが求められているのではないか。同志社はそれができる場所にいるし、伝統とかいろいろもわかっているからできるんじゃないかなって思っています。それがとくに感じていることです。

森 ぼくはこの委員会のただ窓口として来ているので、そういう外国のことに対しては意識はあんまりないのですけど、ただ、いま釜田先生がおっしゃったように、確かに新島先生がアメリカへ行つて帰つてきて、いろいろとアメリカンボードなどのほうから援助を受けながらやつてきた点、ある意味では受け身の形の国際交流であつたような気がするのですね。女子中高もたとえばデントン先生とか、あるいはヒバート先生とかいろいろ宣教師の先生の名前を聞いているわけです。私たちがとつてはそれは歴史みたいな感じの方なんです。そういう人に来ていただいているいる向こうのことを教えていただいたとか、卒業生の方から聞いたたりね、よかつた、よかつたというふう聞いています。よかつた、よかつたから積極的に働きかけたのじゃないかなって、受け身の形で国際交流をさせられてきたというか、べつに困つたことではないのです。それがいまの経済的に豊かな時代になつて私たちが、じゃそういうふう外に働きかけているかといつたら、それは疑問です。現状に安住して滞つているなと思います。と

くに中高の段階というのはなかなか変革しにくい部分があつて、せいぜい英語の時間が多いですよとか、外人の講師の先生と接触する時間がありますよとか、そういう形ぐらいでしか国際的な交流——そんなもの言えるのかどうかわかりませんけどね。これからはなにか確かにもっと外に働きかけるような部分——樋口先生の中にもありましたが、必要でしようね。

釜田 そうですね。樋口先生、山口先生もまったく同じことをおっしゃいましたね。確かにおっしゃるようによですね。同志社の百三十年間、開校の折も非常にたくさんさんの援助を受けたということは事実ですね。本当にそうですね。あとどれだけ海外からの留学生の皆さんが同志社で教育を受け、その後も引き続き何らかの関係を保ちながら帰られてからいろいろな仕事なり活躍して、そこに同志社が登場するかどうかですね、我々が自分たちを語るときにはね。そうおっしゃるとおりですね。

森 だから卒業された方個人は向こうで活躍しておられても、それをはたして同志社がバックアップしているかどうかということでは

すね。

釜田 ほんとうにそうですね。卒業された方にまた卒業後に何らかの働きかけというふうなこと、どれぐらいやっているのか、あまりないですね。そういう卒業生の消息すら、名簿といえますか、現状すら把握できてないのはあるのじゃないでしょうかね。その後どういうふうな、樋口先生は追跡調査つておっしゃったですかね、それはなされてない。この校友会本部でもどうでしょうかね。どれぐらいそこまで把握できているかちよつと不安がありますね、海外の卒業生。それは学校自身がやらないといけないことでもあるのですが、校友会と一緒にたつて把握しないといけないことだと思ひます。本当にすぐ近くのお隣の韓国在任の卒業生の方でもかなりわからなくなつていられる方があります。

それから前々からこの委員会でもそういうような話題が出てましたけど、卒業生の方で活躍しておられる方に母校同志社にお帰りたいだいて何かお話をしていたかどうか、あるいはこちらが何らかの敬意を表するとかなかんかそういうふうな交流というのは全然ないですね、見てましたら。大学に一つだけ名譽博

士の学位を贈呈する制度がありますけど、そんな樋口先生いまままでにありましたでしようか。

樋口 ない。

釜田 ないですね。海外の方で活躍しておられる卒業生の方に名譽博士号を贈呈するとか。あるいは顕彰するとか。

樋口 あれば推薦をすればいいわけだけれど、推薦する人がないのよ、どうしたらいいかということなんですけど。

釜田 いままでそんな感じですね。確かにあんまりないですね。あんまりじゃ、ほとんどないんじゃないですかね。

樋口 ぼくも過去に二人ほど推薦したことはあるのですけどね。

釜田 それは実現しましたか。

樋口 アメリカ人です。

釜田 ああ、アメリカの方。卒業生の方でというのはないわけですね。

樋口 ないですね。

釜田 前から何回もそれに気がついては言つたのですけど、かなりのご高齢の方が多いですから、早くご招待して、同志社イブのときでもいいし、卒業式のときでもいいし、ど

この節目のときにお招きして顕彰するとか何かですね。それがもし学界でご活躍の方であれば、それはほかの世界でもいいのですが、いまの制度は名誉博士号しかないですから、あれをお受けいただくとか、二、三聞いただけでもすごい方がいらつしやるのですよ。いかがでしょうか、坂田先生の国際中高では。

## 中・高における国際交流

坂田 先程から同志社の国際交流がアメリカ合衆国との交流に偏っているとお話が出ておりますが、これは歴史的にみていたしかたないと思います。むしろ中・高ではアメリカ合衆国との交流すら満足に出来ていないのが現状ではないでしょうか。理由を、少し説明させていただきます。私たちの学校では毎年夏に海外勤務者に日本の教育事情と本校の現状ならびに入試状況を説明するために海外で説明会を開いております。その説明会で本校を紹介するためにビデオを作成したのですが、同志社の教育理念や精神のエッセンスを抽出して、それを目で見せるという点で非

常に苦勞しました。しかし、その際強く感じただけですが同志社のスピリッツの源は、やはり十九世紀のニューイングランドにあるという事です。たとえば、同志社の自由は、ピュリタリズムに支えられたパイオニア精神ではないかということですね。それをなんとかビデオで見たかった。その他に、同志社の特性を探したそうしてもヨーロッパや東南アジアから持込まれたものはありません。これは、アメリカ合衆国で勉強し帰国した創立者が、そこで得た精神を基にして学校をつくった。それが同志社だということから当然ではないでしょうか。アメリカ合衆国に目を向けるといことが過去からずっとなされてきたのはこういう理由からだと思えます。

さらに、わが国はまだまだ英語万能、とくにアメリカ英語万能の社会だといえます。私は、昨年夏、先に述べました説明会のためにロンドンへ行きました。その際、ロンドンで本校の生徒の保護者との懇談会をもちました。本校の生徒のうち百名程は、まだ親が海外に在住している者がありまして、説明会を利用して海外で保護者会を開いているのです。この保護者会でロンドン在住の保護者か

ら同志社国際の英語は、アメリカンイングリッシュだ。クインズイングリッシュは教えないのかとの質問を受けました。また、ハンブルグとかパリへ行きますと同志社国際の語学教育は英語ばかりでドイツ語やフランス語は全く不十分だとの非難を受ける。確かに日本人の子供は、現地の学校で現地の言語を習得するのに非常に苦勞をしている。たとえば、アメリカ合衆国では、初心者のためにESLクラスがあるがドイツやフランスの現地の学校ではそのような初心者用のプログラムがない。そこで初心者学年を落とさなければ入学させてくれない。そして猛勉強をしてやつとレギュラークラスに入つて理科や社会も現地の言語で勉強できるようになったのに帰国してもその語学力を維持・伸長する場所がない。とにかく語学教育もアメリカ合衆国に偏っていると見えるわけです。結論から言いますと今後の方向は別として、過去から現在まで国際交流の方向がアメリカ合衆国に偏っているのはいたしかたないことだと言えます。大学に比べて学内中・高の国際交流が遅れている。アメリカ合衆国との交流すら満足にされていなかった。その証拠として、同志社

と非常に関係の深いフリッツ・ブス・アカデミーとの交流すら本校が一九九一年に開始するまで行われていなかったということですね。

一八六五年、新島先生が学ばれてから百三十年ほど学内中・高のどこも交流がなかったということはいかに中・高の国際交流が遅れているかということだと言えます。大学にはAKPとか色々なプログラムがあるので、中・高にはないというのが現状だと思います。

それでは次に国際交流の意義ですが、国際交流によって異文化を知り、理解し、そして異なった文化を受容することにあるとおもいます。つまり異なった文化、異なった価値観を受容することによって、その文化や価値観をもった人と共生できるようになるのだと思います。異なった文化を知り、理解し受容することが大切で、このことが国際交流の本当の意義、あるいは目的ですが、このようなことが現在一般に言われ、行われている国際交流で果たして出来るのだろうかという疑問が湧きます。文化を理解することとは、ある国の、ある社会の人間集団が共通してもつ意味を理解すると言うことですが、こ

れは現在一般に行われているような国際交流では理解できないと思います。私の経験からですが、日本の社会で「前向きに検討する」という言葉がありますが、この言葉は日本の社会では「否」を即答する代りによく使う言葉です。しかし、外国人には「前向き」と言っているのだから「諾」のニュアンスとして受け止められます。そこで日本人の曖昧さがとやかく言われるのですが、日本人の集団では、この言葉の真の意味は容易に理解出来ません。このような意味がそれぞれの文化にある

わけで、これを理解するためには文化の中に長く身を置いていなければなりません。帰国子女にしても、在住した国の文化、人間集団がもつ特定の意味までも理解してきた者もおれば、日本人学校に就学して、現地社会との接触の度合いが低い者もおります。本当の国際交流は前者の帰国子女によって初めてなされるものだと言えます。この意味で、夏休み間に短期間ホームステイして学ぶといった最近よく行われているサマープログラムは、本当の国際交流とは言えぬと思っています。しかし、現地社会との接触の少ない帰国生徒やサマープログラムに参加した生徒は、少なくとも

も外から日本を見ることは出来、また、多くの点で滞在している国と日本との比較が出来るわけで、この意味で一般に言われている国際交流でも意義はあると思います。

最後に申し上げたいのは、大学、女子大とも国際交流は非常に積極的に行われておりますが、中・高は行われていないという理由についてです。まず中・高には国際交流を組織的に行う人間・時間がないということですね。

大学の場合、国際交流センターという組織があり、そこには所長はじめスタッフがおられる。同志社の全体の中で、中・高の国際交流を積極的に推進するような窓口が欲しいですね。

釜田 そうですね。この国際主義教育委員会ですかね(笑)。

坂田 それを国際主義教育委員会でやれやツと言っていたら、それでいいのですか——(笑)。

釜田 ありがとうございます。それでは吉川先生、どうでしょうか。

吉川 私自身同志社にお世話になってから三十年ぐらい、学生時代を含めてなるのです。同志社にお世話になって三十年というこ

とは、私自身香里出身で、いま香里で教えているという形になるのですけれど、私が中三のとき初めて英語の時間に教室に交換留学生を先生が連れて来られました。そのときまたまた、手を挙げて質問しそれが通じた。あつ、これはおもしろいやないかと、こういう単純なきっかけが私自身にとつての国際交流における第一歩だったと思うのです。

そのころ、器械体操という全然英語に関係のないようなところにいたのですが、偶然そのころに足を悪くしまして、ちょうど一年間運動できませんよと言われて、それでたまたま担任の先生が英語の先生で、「その間、英語でも勉強したらどうや」ということでESSに入りました。それでその仲間の五人ぐらいが留学をしたいなということで、切磋琢磨といいますが、お互い、新島襄の精神のもとに頑張ろうやないかということで、いまでも続いていますYFUという機関を通して、もう二十年以上前になりますが、十四期生として一年間アメリカテキサス州ヒューストンで過ごしました。それが本当のきっかけで、その事がなかつたらいま現在ここに座っていないかもしれません。やはりある意味で一つの体

験がずっといろんな形で自分自身に影響を与えており、それが付加価値であるのですが――海外体験というのは絶対付加価値を得ると思うのです。それがいいところなのです。そして同志社の推薦制度と留学との関係ですが、とにかく留学をしたいと言ったときに、個人的な話ですけれど、父親が「いいんじゃないか、同志社はそのような精神だし、一年間いい意味の浪人生活をしたと思つたら、いいんじゃないか。同じ一年間、次の学年にいけないかもしれないが、それはとても自分にプラスになる浪人生活と考えると、それが付加価値だと思ふ。それは将来どういふふうに影響するかわからないけれど、受験勉強にとらわれない同志社の推薦制度のもとで、留学できればすばらしいのと違うかと。それが二十年以上前の話ですけれど。

そういう話をずっと私は生徒にもしてきましてし、こういう感じで推薦制度を活用してみてもいいことはずっと学校内では言ってきたつもりなんですけれど、いま現在ふたをあげてみると、この前の同志社インターナショナル・ポートでもご紹介しましたけれど、二十数年後どういふふうなプログラムがいま

現在の同志社香里にあるかという、YFUのプログラムしかありません。現在中高でなかなか新しいプログラムは組みにくいとか言われますが、二十年以上たつてもいまだに同じであることを考えると残念だと思つていたところなんです。

そうしますと、この四月にちょうどこの国際主義の委員会が全同志社という規模ででき、時を同じくして我校にビジョン委員会というのができまして、当然名のごとく、ビジョンですから、同志社香里の将来、どこを向いていくのか、どんな学校にするのか、学校規模の問題、どういふふうな入試にするのか、そういういろんな全体像を考えていかなければならないと、二十一世紀に向かつて、生徒数の問題もありますし、ということで、やはり国際教育を充実しなければならぬというのが同志社香里の一つの柱に入ったわけなんです。

私が思うに、なぜ今になつて国際教育の重要性を再確認する必要があるのか、同志社である限りこの柱は、もうずっと入つていて、今頃は数多くの国際交流プログラムがあつてしかるべきなのですが。確かにいままでは我

校では充実できていないので、もっと充実していこうではないかということが再確認でき、ビジョン委員会を受けてまして国際教育の充実の研究会が発足したのは大きな前進だと思います。これがこの四月で、ちょうど一学期間かかりまして、一応の報告をビジョン委員会に答申し、この九月一日、ちょうど明日の事なんです、多くの提言を会議に提出しようとしているところなんです。

研究会のほうの提言というか、どういうふうな形で我校の国際交流を進めていこうかということなんです、先ほど坂田先生も海外のプログラムは既成でということですが、それすらできていないので、今から作るとなると少なくとも既成でない、同志社香里独自の魅力ある一つのプログラムとして、こういうプログラムがあるから生徒が香里に入学したいなあ。生徒がこういうプログラムに参加してみたいなあ、うちの学校に来たいなあ。そういうふうな魅力のある海外語学研修とか、それからちよつと先になるかもわかりませんが、海外修学旅行であるとか、クラブ単位での海外合宿も含めた国際交流など、たとえばラグビーが強かったらクラブ交流、ニュ

ージーランドへ行って合宿してもいいじゃないか、音楽系クラブがたとえばヨーロッパに行って研修してもよいのではないか、しかしいまクリアしなければならぬハードルがたくさんありすぎて、例えば全員を飛行機に乗せることの是非などまだクリアできてないわけなんです。いろんなクリアしなければならぬ問題がたくさんありますので、それが一つ。

それから海外というと、アメリカに目が向いていたということがありますので、在日外国人の方とも当然いろんな形で交流していかなければならない。それは一つ当然重要な課題なのです。国際主義教育を進めるには教職員を啓蒙しなければならぬということ、いろんな形のセミナーとか、講演会とかというような形のプログラムを組んでいく事を考えています。どちらが先になるかわかりませんが、逆に教員もいろんな意味で刺激されるでしょうし、お互い切磋琢磨できるのではないかと期待しているのです。

そして留学生の受け入れも、いままでは本当に短期の夏休みだけのプログラムだったの

ですけれど、それだったら本当に同志社香里という学校を理解してもらえない。積極的に長期の留学生を受け入れてみてはどうか。そしてうちでもいままではギブ・アンド・テイクの、ティクばっかりだった国際交流を、少なくともギブの面を何らかの形で進められないのか。一年間の留学生の受け入れをお願いできませんかということはいままででもよく頼まれたのですが、いまではうちはだめですという形で答えていたのですけど、少なくとも家族を積極的に探してみようとか、そういうようなレベルからのもっと国際交流の理解を生徒の中に浸透させていかなあかんと違うかなというふうなことは言われてきているのです。

最後に、先ほども言われましたが、中高レベルではメンバーが変わりますので、魅力あるプログラムをつくるには恒久的な機関の必要性を感じています。又中高大をまとめるようなしかるべき機関があればもっと一貫教育の一部として国際教育をとらえることもできるでしょうし、いろんな形で情報も入手しやすいということで中高大のパイプが太い全同志社的な国際交流の機関がなんとかできない

かなというのを期待しているんです。

釜田 だいたい同じことが出て(笑)。

坂田 だけど、お金が要るのですよ。

吉川 基金の設立にでも結び付いたらいいのですが(笑)。

坂田 やっぱりお金は同志社全体でお考えただくというようにして欲しいですね。

樋口 大学の場合には比較的いろんなことを資金の面でも人的な面でもやりやすいことがありますが、中高の場合は、たとえばアーモストのような小さいまちでも高等学校、まあ中学もほとんど一緒のようなものですが、外国人の子弟に対する特別クラスというのがあります。たとえば同志社の中高で客員教授や研究員の子弟を受け入れるという場合に、そういう準備ができていくかどうかという問題もあると思うのです。

たとえばアメリカのマルチカルチュラリズムなんていうのは、昔々、娘が最初に小学校一年のときに行ったときからすでにそうなんですけども、うちには日本語のできる先生がおられます。つまりアメリカでは法のもとにおける平等ということでしょうが、英語ができないからアメリカで教育ができないと

いうのは憲法違反だという考え方があるんじゃないかね。もしこつちが日本語のできる教員を要求すれば、用意しなきゃならないということがあるのです。それを「それでもいいか」と、「いや、結構です」ということで、そのときはそのまま普通のクラスに入っていたのですけれども、それから高等学校のときにもう一度行ったときに、カンボジア、それからベトナムからの子供たちが非常に多い。とくにカンボジアが多かったのですが、特別クラスを編成してそういう子供たちに専門に英語を教える教員がちゃんといるのですよ。しかもそれは差別されているわけじゃないのです。

「どつちに入りますか、どつちでもいいですよ」というような形で。

ほくはたとえば我々の大学でもそうですけれども、客員教授や研究員を引き受ける場合に、そういう準備を本当はしてなければいけないのじゃないかなと思うのです。これは特に中学や高校に関係のあることですけれども。

### 日本語教育センターの設置を

坂田 一つの提案ですが、同志社の中に留学生や帰国子女の日本語教育のために日本語教育センターをつくっていただけないでしょうか。留学生は、一年間そこでインテンシブ・ジャパニーズ・コースを受けさせます。日本語の教育の場合、中学生、高校生、大学生を一緒のクラスに入れても可能だと思います。語学の習得は中学生の方が、高校生や大学生よりも早くこの点混合教育も出来ます。もし、年齢差がありすぎるといふのであれば、中高一歳か高・大一歳にすればよいと思います。留学生に日本語を教えるのですから、英語の出来る先生が必要となりますが、これによって同志社の留学生の受け入れもっと広がるのではないのでしょうか。

釜田 そうですすね。

坂田 現実には中高のカリキュラムとか、現在ある教員スタッフで、日本語が全然できない生徒を受け入れるというのはかなりしんどいですよ。たとえその生徒が英語ができてもしんどいですね。

釜田 そうすると、いま樋口先生がアメリカの状況をおっしゃったああいうのは同志社ではまだ現状では難しいということでしょうか。

坂田 そうです。だから日本の生徒が海外へ行きますと、もう次の日から中高どこでも来いということで、行きますと、入り口で校長先生がにこにこ笑って迎えてくれるところ。ところが日本では、我々でもそうですけど、一人受け入れようという、教職員会議でワイワイやって(笑)、結論が出るか出ないか、そんな程度ですから、これは同志社においてすらそうですから。

釜田 樋口先生がさっきおっしゃったクラスというのは、たとえば一人でも二人でもそういうのに対応するということですか。

樋口 そうです。とくに西海岸はアジア系やメキシコ系が多いでしょう。そうすると教員が一つのクラスに三人ぐらいで、同時に通訳をするという形で教えるのです。それは要求があつたら断れないのですよ。憲法違反だと(笑)。

坂田 やつぱりマイノリティの教育というのは非常に重要視しています。そのためにう

ちの生徒の保護者で海外にいた人なんかは、いわゆるボランティアという形で手伝いにしたりしてますけどね。

樋口 それが多いですね。いわゆる代用教員の形で来ている人が多いですね。留学生が手伝つたりね。

釜田 そういう予算措置を講ずれば同志社でもできるのですか。

坂田 できると思いますね。

釜田 予算的なものだけですか、それは。

坂田 予算とやつぱり一つは人ですね。それともう一つは事務組織でしょうし。

樋口 たとえば韓国なり中国から中学生、高校生が来たいという場合に、韓国なり中国なりの大学及び大学院に來ている学生をチューターで頼んだりしているわけです。

釜田 そうすると、たとえばいま中高でクラスにそういうチューターをつけて、子供一人座っているのに対し専門的に補助すれば受け入れ可能ですか。

坂田 座っているのに一人つけてという大変ですから、まずやつぱりインテンシブにある程度教えないと。

釜田 ある程度もちろん並行してね。

坂田 だから私たちの学校でも全然日本語ができない留学生が来た場合には、社会科学科と理科とか国語とか、高い日本語力(国語力)を必要とする教科は全部取り出して日本語を教えるわけです。日本語だけずっとやっているのと彼らもしんどいだろうというようなことで、図書館で一時間英字新聞を読んでなさいとか、あるいはまた手の空いている教員が順番に日本事情について話をするのです。そういうことのでかなりの工夫が必要で、それが教員の負担になると思うのです。たとえば十七時間授業を持つていて、空いている時間をそれに当てるといって、三時間その子のケアをするとなれば二十時間ということになりますから、これは非常にしんどいことなんです。

釜田 現在のスタッフの枠内でやれというのはちょっと無理ということですね。

坂田 これはやつぱり無理だと思いますね。いくら教員にそのマインドがあつても無理と思うのです。

釜田 その辺の解決が必要なんです。

長根先生、いかがですか。

長根 日本語教育という点でちょっと感想めいたものかもしれませんが、やはりいま皆

さんがおっしゃったように、日本に来たいという学生、あるいは生徒は、日本文化と同時に言葉を学びたいという強い関心をもって来ていると思うのです。とくに海外でしたら、日本人のネイティブ・スピーカーに習える生徒というのは非常に少ないでしょうし、メディアのとらえ方も誤解を生むような形かもしません。教科書での取り上げられ方を見ても問題を感じます。ですから彼らが期待しているのは、こちらでの日本人のネイティブ・スピーカーによる授業のほうです。でも実際にはその受け入れ態勢というのは十分とは言えません。高校のほうでは年に一〜二名、A

F S 留学生を受け入れますが、やはり現状はボランティアで普通の教員が自分の空き時間に雑談、あるいは簡単な日本語のテキストを使ってという授業で、システムチックな形で授業ができていないのが非常に残念だと思っています。

同志社大学に A K P 留学生が各国から来ているのですから、そういった学生も別の意味で日本の教育現場といえますか、学校教育の現場には非常に興味を持っていると思うのです。だからそういった日本語教育という一つ

の、ほかにもいくつも可能性があるとは思いますが、何かそのあたりで接点を見い出して、チューター制度のような活用ができないかということは思います。

釜田 樋口先生、いま共通のそういう日本語教育のセンターのようなものをつくって、中学、高校へ、留学生も含めて対応すべきだというお声がかかり出ていますけど。

樋口 ぼくは可能だと思いますけどね。

釜田 何か構想はございますか(笑)。ちょっと一つアイデアを。

樋口 ぼくはそういう構想があれば進んでやりたいですね。田辺につくりたいですね。

釜田 先生のところで何かをいかがですか。

#### 帰国子女の言語教育

樋口 話がちよつとそれるかもしれませんが、けれども、国際中高のほうから帰国子女の教育

について、とくに英語以外、英語も含むのかもしれないんですけど、英語以外のフランス語、ドイツ語、スペイン語といったそういう生徒を大学のスペイン語なり、フランス語なり、ドイツ語なりの授業に出るというようなこと

はどうでしょうかというようなお話が実はあったんですけど、私は大いに賛成なので。問題は大学から大学院に進学する場合のようにいわゆるスキップシステム、つまり飛び級はちよつとできませんけれども、しかし、我々のところに来て講読、あるいはスペイン人なり、フランス人なり、ドイツ人なりの上級会話でもいいんですけど、そこで我々のほうさえ受け入れれば、その生徒が来て、たまたま国際高校が近いですから、あとはその国際高校のほうを単位として認定するかどうかということを決めてくれたらいい。

ただし、我々のところに来れば、我々のほうでは高校生だからちよつと成績は甘くしようということはないわけですからあとの措置は高校のほうでやってくれたらいいわけです。ぼくは大いに実現の可能性ありとにらんで、この九月からちよつとお話し合いをしようということにしていますけどね。

坂田 それはありがたいことです。是非お考えいただければと思います。

釜田 それはいいですね。

樋口 ぼくはせっかくの子供たちのそういうあれを生かしてやらないというのは、ちょ

つとかわいそうだなと思う。

**坂田** 英語の場合は習熟度別ということをやっておりますので、ある程度生徒たちとか、その保護者は満足しているとは思いますが、本校には第二外国語と言われるドイツ語、フランス語、スペイン語あたりをせっかく海外で勉強してきて、維持、発展させるに十分なカリキュラムという満足する受け皿がないのです。英語の場合は先ほど樋口先生がおっしゃったように、アメリカなんかへ行きますとESLというか、イングリッシュ・アズ・ザ・セカンド・ランゲージというのがあり全く英語の話せぬ生徒にも初歩から教育してくれるのですが、ドイツやフランスではそういったクラスがないのです。そうすると向こうへ行き、現地の学校に入学させてくれと言いますと、フランス語とかドイツ語のテストを受けさせられます。テストと言ったって全然できないわけですから、一年か二年下の学年に入れられるわけです。それで一生懸命勉強して、ようやく理科とか社会とかの授業がドイツ語、フランス語でついでいけるようになった。ところが、帰ってきたらそれを伸ばす場所がないのです。まあこれはうちの学校の

一つのいまの最大の欠点というか、ウィークポイントなんです。

だから現在、海外から帰ってきた子供とかからこの点について苦情がものすごくありましてね。これを何とかしないといかんわけです。うちの学校の中でいわゆる習熟度別授業を行うか、それともたとえば大学で習熟度のかなり進んだ子供の教育をお願いするとかを考えなければなりません。これは時間割の調整とか、いろんな点で難しい面はあるかと思いますが、そういうことをやらせていただければ有難いですね。幸い本校は田辺校地の中ですから。

**釜田** ほんとうにそうですね。

**坂田** ひとつぜひよろしくお願いします。

**釜田** 先生はそういう帰国生徒の方をたくさん知っておられるのですが、いまのそういう帰国後の言語教育というか、いまおっしゃったドイツ語、フランス語、スペイン語以外にもそういう要望というのはありますか。大いに当然なものというのはいくらも出てきますか。

**坂田** いや、それはいいんですけど、ただ中国から帰ってくる生徒が今後かなりふえてくるのじゃないかと思うのです。それともう

一つ、ハンブルですね。だから次にもしうちの学校で第二外国語を追加するとすれば、中国語とハンブルということですね。

与える時代

— 基本は語学力 —

**樋口** ぼくばかりしゃべって申しわけないのですが、釜田先生が同志社の国際交流の歴史を概観されていたのですが、アーモスト大学との関係でいいますと、たまたま私はいまアーモスト大学の同志社の代表ということをさせられているものですから。まだ公になつていないのでどうかというふうに思うんですが、大学と言うより、アーモスト大学の代表として言えはいいだろうと思つて言うのは、アーモスト大学のほうもいままで受け入れてばかりいた。それでいまわが国の経済発展から見ても、全部受け入れなきゃいけないような状況でもないだろうと。同志社もそういうふうと考えておりますけど。それで実は来年度九月からできればこつちから行く教員を短期間、交互に派遣をして、それでこつちから行く教員も、向こうから来る教員も、それぞれの行った先でセミナーをやる

か、あるいは講演会をやるとか、あるいは例えば半年の場合には授業を担当するとかという形で交流をしようじゃないかというわけで、最短が一月、最長でワン・セメスター、半年ですね、だからそういう形の新しい同志社とアーモスト大学のアグリーメントをつくらうじゃないかというので、いま学長、総長のところに案がいつておりますが、たぶん問題ないと思うのです。それで費用は全額を受け入れ側ではなくて送り出す側が負担しようというわけです。とくにアーモスト大学は長期の場合は人的に余裕がない、それで短期なに行ってもいいというのを教員の調査をしたら八〇%近くあつてね、それでやるうじやないかということになったのです。

つまりぼくがいま言いたかったのは、これからは学びに行くとか、もらいに行くだけじゃなくて、与える時代になってきたなと。我々におまえやれと言つたら、ちよつと引つ込み思案でそれができないこともありうるかもしれませんけれども、しかし、何かの形でそういうことを積極的に考える時代になっていると思うのです。

釜田 いまのお話はさつきから森先生も

つしゃつてかなり出てきましたけれども、そういうあたりからどうでしょうか、なにか具体的な将来の展望というような課題にひとつ入つていただけますでしょうか。いままでにもすでに展望もお話の中に出てきているのですが――。

吉川 確かにいまさつき言つておられた与える時代が来ているということは、ひしひしと感じられると思うのですよ。たとえば短期でオーストラリアに留学している日本人は最近目立って多いけれど、結局オーストラリア人の日本語のクラスに彼らに来てもらつても、日本のことは何も知らない場合が多い。結局何もギブしてないわけですからね。この事は大きな問題です。そしたら当然行く前に事前教育をする必要があるし、そういうオリエンテーションのようなプログラムを確立しなければというふうな形になってきますし、どなたか忘れませんでしたけれど、海外青年協力隊のメンバーで、その人の話によりますと、技術力プラス人柄を括弧に入れて、それを語学力で掛けたのが協力隊の成功の度合いなんだという事を話されていたのを聞いたことがあるのです。ということは、その人の何を与

えたいかということ、その人の人柄というのが大事だが、やはりそれを伝える語学力でマルチプライされて、成功度合にむすびつくということがありますのでね。相手にギブするにもやはり自分の持っている技術力、つまりたとえば高校生でしたら、自分が空手をやっているのであれば空手を伝えたいとか、そういうことでも技術力だと思ふのですよ。中高レベルの交換であればね。又はぼくは歴史が得意だから、日本の歴史のことはかなり詳しいので、日本の歴史をオーストラリアの日本語クラスで発表できる。それをきちつと英語でも説明できる。そういうのが中高生にとつての技術力だと思ふのですよ。それに人柄を足して、自分の発表できる語学力で掛けると、やはり貢献できる度合いというのが出てきますから、語学力というのは何にすれば、それは先ほど言われたアメリカ英語であれ、イギリス英語であれ、これは関係なしに、とにかく重要になってくると思ふのですけれど。相手にギブするにもその基本は語学力であり、そして将来もつと大きな交流に貢献できるようにさらにそれを磨きに行くのも語学研修の目的の一つですが、少なくとも行く前

にある程度きちつとした語学力があれば、行ってからの伸び率も飛躍的なんです。その辺をちよつと勘違いされていて、ゼロから行ったら十になって帰ってこれるんじゃないか。行く前が多ければ多いほど向こうへ行ってからの吸収も多い、そういうことをしっかりと教えないければ、真の国際交流に結びつかないのではないかと思うのですけどね。

**釜田** いまおっしゃいました行く前の教育というのは、まさに同志社のこの国際主義教育委員会が問われているところですね。

それからまた、私もさつきちよつと言わせていただきましたように、本当にいま国際的に活躍しておられる層の方、それまでは行くチャンスというのはほとんど味わうことのない時代なんですよ。だから先生のお言葉では行く前の教育、この今出川の体験ですね、それからそれを中心にした国内での体験というものが素地になっていて、そしてたまたま七〇年代、八〇年代、九〇年代に実際に行くというチャンスというか、行かなくてもまたこちらで迎えるというようなチャンスに遭遇した。ところが、そこで非常に大きく活躍しておられるわけですよ。だから、私もこれ

はものすごく関心があるのですが、行くというチャンスはいま非常に恵まれているようだけれど、たとえば二万人の学生のパーセントでいきますと、依然として行かない学生のほうが圧倒的に多いわけですよ。行くチャンスでもっとと将来になるか、または一生国内にいて迎える形か、あるいはそういうチャンスもなく、しかし非常に国際的な感覚・精神をもって一生涯生きていかれる人生というありますよね。だから最後は先生のお言葉にある行く前の教育が重要になる。考えるべき点はここですよね。

**吉川** 再度申せば、なぜ英語を勉強しなければいけないのかなぜ日本にいるのに外国語が必要か。そういう質問がまだ中高レベルではあるわけなんです。私達は二十一世紀に活躍する子供の教育をしていて、いま二十世紀で、二十一世紀というのは当然ネットワークの時代であり、ネットワークと語学力と創造性、その三つで勝負の時代だと思うんですよ。それなのにまだそういうこと、つまりなぜ外国語を勉強する必要があるのか、そういう素朴な質問から片づけて、こつこつと国際理解教育をやつていかなければというのが、

中高の現実なんですよ。

**森** 生徒自体はそうでしょうね。留学したいという生徒は勉強しに行くのだという気持ちにはものすごく強いと思うのですね。しかし、受け入れる側というのは、日本の文化を知りたいということがものすごくあると思うのです。だから外国に行つていろいろ日本のことを聞かれて、それで外国の文化を受け入れるのが強く日本を紹介するのが準備不足で、たじたじしているというふうなことをよく聞きますからね。やつぱりそれは日本から出て行って短期間でも住む場合は、向こうに何らかの貢献をしないと意味がないですね。従来的からのもらつたらいいんや、受け入れられるみたいな立場のものが依然と残っているのですね。

**吉川** 日韓の高校生が交流しても、日本人の高校生は日本の歴史を全然知らないし、大変落胆しましたというような内容の、クエスションネアリーに対する答えが向こうの高校生から返つてきたりして。それでは寂しいですよ。実際に行く前にギブの教育を自ら自分に課すというような姿勢をうえつけなければと思いますしね。

山口 いまのことに関して、わりあい個人的なケースになるんですけど、私の学校にスィスのお医者さんでI P P N W（核戦争防止のための国際医師の会）に所属してられるハンス・レヴァンデルさんという方が来られたことがありました。広島の場合に出席されたあと京都へこられたときに同志社中学を訪問された。そういうきっかけで同志社中学の生徒会とハンスさんが話し合う機会がありました。ハンスさんがライフリンク・ファンデーシヨンの議長で世界じゅうに五十数カ国の学校間ネットワークをつくらうということや、いまも三分間で自分が世界中の人々に、環境のこととか平和のことなど、訴えるとしたらどんなことを訴えますかというそういうメッセージをつくるように若者によびかけていたそういう人だったのです。いま同志社大学の二年生になった生徒たちが中学三年生のときにその方が来られて、その方と会っているのです。

通訳はもちろん英語料がしたのですけど、ハンスさんはスウェーデンの方やけど、直接わかりやすい英語で話されたのです。それを聞いて自分らもちよっと地球環境の

問題、なんか考えなあかんなどいうので生徒会でけっこう討論したり、そして人文字をつくってピース・メッセージを風船につけて、飛ばしたりね。そういうことをしたことがあるんですけども、その次の年の生徒たちもつと大きな形で人文字をつくりたいと言って、ピースのイメージとして、緑の葉っぱを全校生で人文字にして描いて、朝日新聞社が空からセスナ機で写真を撮ってくれたのです。

ちよと湾岸戦争があつた時期だったので、二、三年生の有志で、三年生はほとんど生徒たちがライフリンク・ファンデーシヨんでネットワークのある国に、自分はこの国に手紙を出したいというそういうことをやって、合計四百通ぐらゐ送つたのです。「日本の私はだれだれで、私は相撲が好きで」とか、そんなわりと簡単な英文なんですけど、緑の葉っぱの人文字の写真入りの絵はがきをつくって、自分たちのメッセージもかいて世界じゅうに送つたのです。それが各国の代表のライフリンク・コーディネーターのところへ届いているのです。それでそこからまた手紙が来て、個人的にけっこう交流が続いている子もあるのです。だから英語料の私から見たら、

具体的な何かで、単なる仲良しじゃなくて、

地球環境のこととか、湾岸戦争のことやらちよとなんか一緒に考えたいというぐらゐのことはあつたほうがいいかなというテーマももつた文通、そういうのができたらというのでやってみたんですけど、それが一つあつた。

そしたら、そのときに中学三年生だった生徒が現在大学一年生なんですけど、その子たちの中の何人かが、ライフリンク・セミナーがスウェーデンで二年に一回あるのですけど、ことしそれに行きたいと言って参加しました。二年前に第二回ライフリンク・セミナーに、私自身と高校生の有志で行つたのですけども、そのときに痛感したのは、その高校生たちは、中学のときに英語部の生徒で英語はすごくわかるのです。だけど、自分の意見をもっているのに言えないということです。いぶん苦しい思いをした。そのとき参加した各国の人たちというのは二十四カ国、五十人ぐらゐですけど、その二十四カ国の中で自分の意思を表現できないのは日本とスリランカだったのです。インドの方と、あとヨーロッパ系の人たちは全部ネイティブじゃないのだけど、とてもよく話せるのです。よく聞いてい

たら、そんなに完璧な英語ではないと思うのですけど、自己表現、自分の意思がちゃんと表せる。それでそのときに参加した高校生たちは、本当に自分の意思を伝えるためには自分の中味もつくりたくないといけないし、表現する手段も必要だということを痛感して帰ってきたのです。

その二年後がことしなのですけど、同じメンバーじゃないのですが、その人たちにいろいろ話を聞いたメンバーがライフリンクというのはなんやはっきりしない団体みたいなんですけど、とにかく世界じゅうの若者と先生方がパッと一週間ほど二年に一回、夏にスウェーデンで集まるので、五十カ国ぐらいの人が一ぺんに会うことなんてなかなかできないし行ってみたいということになったのです。二年前に自分の気持ちが表示できなかったということをどうやって事前に準備するかという、先ほどの事前の準備ですけど、まず日本の国のこと、政治のこと、法律のこと、相当勉強してもらった。大学一年生でしたけど、同大の英文科、法学部、京大に行った人もいたのですけど、自分の意見を表現するための英語の勉強、ブラッシュアップをして、それ

と日本の文化をいかに伝えるかということも絶えず意識しながら四月ぐらいから準備したのです。

とにかく自分たちがなにかやっていきたいと。だから中学三年のときにピース・メッセージを送ったことがきっかけになって、四年後に今度は大学生になったときに本当に行ってみた。そのセミナーそのものは一週間ほどだったのですけど、合計二週間ほどスウェーデンにいて、スウェーデンでいろんなこともありました。この夏のセミナーに参加するために持っていったレポートの中に、日本の代表の意見として、日本の学生は自分の考えのある程度持っている人は持っているけど、それがよその国に行ったときに表現できない、それがいちばんのネックだということを二年前に痛感した。今度もディスカッションのアピリティーに欠けていると思うけども、その点くれぐれも手助けしてほしい、いろんな意味での援助もお願いしたいと書いた。今回は水質汚染のことが共通テーマで参加したのですけど、そんなにまとまったものではないのですけどレポートをもって、京大生二人と同大生二人、計四人行ったのです。同大生の人

たちは全部同志社中高の出身、京大に行った子も一人は同志社中高の卒業です。

最近、ライフリンク・ファウンデーション

から、セミナーのときの様子を伝える手紙が届いたのですが、日本の学生たちは私が危惧していたことを乗り越えて、ディスカッションでもうまくみんながちゃんと討論できるように、逆にリーダーシップをとってやれるほどになっていた、本当にそれを心配することはなかったということ、文化的な面でもいろんな会話の中でもその会議を豊かにするよう、すばらしく貢献してくれたというそういうようなことが書かれていました。これくらいのう読んだばかりの手紙なんです。いきのう読んだばかりの手紙なんです。

そういうこともあったので、大学生ぐらいのときに、自由によその国に行ける時期の人たちに、日本のこともちゃんと勉強してもらって、世界のいろんなことも学べるというそういう立場にあるわけだから、できるときに意思をもってよその国へ、旅行でもいいし、セミナーでもいいし、行ってほしい。そんな学生とか若者を育てていけたらいいし、大学時代にそういうことが実つていったら、また大人になっていろんなところで活躍されるで

しようし、その人たちが次の世代の子供たちを育てるといことになるなアと思っっています。

ただ、彼らは同志社大学の中でそういうことでミーティングしようと思っても、どこでしたらいいかわからない、なかなか場所が貸してもらえないとか、そういうことでとって困っているということを言っていました。よく同志社中学まで来て話し合ったりしているのですけど、田辺で集まりたいと言ったりしてましたけども。ですからいろんな積極的なことをちゃんと提示してあげたら、ものすごくいい力を出してくれるなと思っていましたので、学生に対してはわりと幻滅している面もあったのですが、そうではないのじゃないかと思うようになりました。一つの個人的なケースになりますけど、ちょうど手紙が来ていて、いま先生が事前の準備等いろいろ言っていたので、ちょっと関係あるかなと思っ

### 留学生に対する援助

樋口 大学は国際センターを中心に、

向こうからの留学生に対する何らかの援助と  
いうのはある程度可能なんです。しかし、高  
高の場合にはそういう資金的な裏づけがない  
ということがあると思うのです。それで、こ  
この国際主義教育委員会がそういう外国から  
の留学生に対する奨学金を出すというような  
組織ができればばくばくいいなと思うのです  
どね。たとえば韓国なら韓国の学校を指定し  
ても、あるいは向こうのどこかに依頼して全  
体から選んでもいいのでしようけれども、毎  
年二人なら二人とか、一人なら一人、中学、  
高校、大学どつちでもいいけど、韓国だけじ  
やない、どこでもアメリカもヨーロッパも含  
めてですけど、なんかそういうことがね。

たとえばいまのアーモスト大学の例でい  
ますと、ぼくは、新島スカラーと内村スカラ  
ー選考の責任者になっているのですけども、  
優秀な学生が集まるのですよね。それで面接  
をして、いくらか英語で質問をしたりしてと  
いうことをやっているのですけども、とくに  
東京を中心とする内村スカラーなんていうの  
はすごく優秀なのが集まるのです。それと同  
じように同志社が外国の生徒、学生に対して、  
優秀な学生なら受け入れますよ、どうぞお越

しくださいという、そういう資金的な裏づけ  
のあるようなものもよし可能だとするなら  
ば、この委員会だけだと思うのですよね。そ  
の裏づけをばくばくはぜひ来年度要求してほし  
いと、その実現の可能性はどうかわかりませ  
んけれど。

釜田 それはいまの要するに――。

樋口 釜田先生は建物というけど(笑)、建  
物の前に。

坂田 本校と交流をもつフィリップス・ア  
カデミーですら一億九千万ドルのファンドを  
持つております。これは一九九一年なんです  
けど、そのファンドにつく金利で奨学金を出  
し世界じゅうから留学生を招いているので  
すね。

釜田 何人ぐらい集まるのですか。

坂田 何人ぐらいかは今覚えていませんが  
とにかく世界中からです。とにかく向こうの  
学校のポリシーというのはどの国からも留  
学生を受け入れるということですね。一億九  
千万ドルというから約二百億円ですか、これ  
だけのファンドをもっているのですね。それ  
が一高校なんですから大変な額です。それに  
比べ大同志社というたら問題があるかもしれ

ませんが。同志社全体が、千三百万円ぐらいではあかんでしょうね（笑）。

釜田 奨学金という形だったらまたべつですよね。いまのこの委員会、それは予算の中には入ってないのですよ。

坂田 とにかく中高での留学生の受け皿をもう少し強化して欲しいですね。たとえば日本語教育研究センターでもつくとか。かなり予算が要りますがね。

釜田 確かに奨学金を本当に積極的に出して優秀な学生を数名でもね。ある年はそれは中学からなり、高等学校からでもいいし、大学からでも大学院生でもいいですね。四段階ぐらいに分けて本当に積極的にこちらが受け入れれば大きいですよ。

坂田 フィリップス・アカデミーなんか、海外で同窓会をやるために校長以下数名の間が各地を回るので。前回日本へ来た際香港へ回って来たと言っていました。そこでは学んだ生徒やその親も含んで、また、現在学んでいる生徒の親も含んでやるわけですから、ものすごくネットワークが広がるのですね。やっぱり感心します。

森 大学の中にはたくさん人材はあるわけ

ですね。たとえば中高が留学生を受け入れるとき、さっきの話ではないですが、チューターとしてついてもらうとかありますね。そういう人材の組織をつくっておけばいいですね。いまは各校独自ばらばらに対応しているということでしょう。どうしていいかわからない現状です。交流委員会である程度組織だつてつかんでおいて必要なんですということ聞けば、じゃこの人材がどうかということふうな。

釜田 もしいまそういう中高の留学生受け入れに、大学がチューターを送るという形で協力できるとすれば、素晴らしいですね。留学生の中からお願いするというようなことも可能で、すし地域研究を中心に行っている大学院アメリカ研究科に在学している学生諸君の層はかなり厚いし、また、海外から迎えている多様な学生諸君を含めると、もつと層は厚くなりして。アメリカ研究科はかなり協力できる人材を抱えていますから、できると思えますね。そういうことをやったら、またそれは学生自身にとりましても勉強になりますね。

森 かつて大学の方へ客員で来られた先生

のお子さんを中学生として受け入れるのも大変なことでした（笑）、英語はいいとしても、社会、国語などはどうするのやというようなこといつてね。

釜田 確かにそういうチューターがついて、日常生活を含めて勉強のあとを面倒見て、そういうのを含めて要りますね。

吉川 基本的なネットワークの話じゃないですけど、本当に基本的なネットワークとして、この前お願いしていたのは、いろいろな言葉を教えていただいているネイティブ・スピーカーの数は、大学、中高と合わせて同志社全体を合わすとすごい数だと思っております。その横の連絡とかがあまりなく、どなたがどういうことをどこで教えておられるのか、又はネイティブどうしの横のネットワークもないわけですね。ですからたとえば新学期でもちよつとした所に集まってもらい、新島会館でもいいですし、集まってもらって、ちよつとビール、会食でもして、話をしてもらって、そういうような形ででもネットワークの基礎というものはできると思うのですね。そういうところから草の根的な交流とか同志社という学風を理解していただいて、新

しく来られるネイティブに伝えていただく。ぜひこのネットワークの早期実現をお願いしたいのですけどもね。

釜田 発足を樋口先生どこかで(笑)、この年末か、あるいは春の新学期のときとか。

森 現在のところは結局個人的なつながりだけですからね。情報のある人はいいけども、ない人は必要なとき困りますね。でも同志社のように大きな組織だったら、組織としてそういう機能があってもいいように思っていますね。

山口 中学でも、来られた教授のお子さんたち三人ほど半年ぐらい引き受けたことがあったんですけど、英語科はすごく受け入れたらいいと思っていても、学校全体としてはやっぱり受け入れるのに大変だと思ふ面もあるのですね。だからその辺を全体の交流委員会でバックアップしてもらおうとかなんかそういうことをしていただくと、すごく私たちも力が出て、助かると思います。

それと、うけ入れるのは大変だと思つてられる方が一緒にそういう生徒を受け入れて、少しでもそういう壁を取り除いていける、なくしていけるようにするのも国際交流という

ことでは大事なことなんではないでしょうか。

吉川 生徒のプログラムを充実するためには、どうしてもそういう恒久的な委員会がプログラムをつくらないと、又は学校全体として動かないと、また全同志社として動かないとだめだと思うのですが。

樋口 従来、大学に来ていた研究員なり客員教授なりの子弟というのは、しょっちゅうそういう問題の相談があるのですけど、ほとんど神戸の国際学校に行っているのですね。これはものすごく金がかかりますしね。そういう点も国際高校のほうでちよつと考えてくれるということ喜んでいるのですけど。

坂田 うちも満足なことができないんですけど、受け入れることは受け入れます。留学生受け入れの組織としては、国際交流委員会というのをつくつています。そこが全てをやっているわけです。英語科となると、どうも教科的な特別のものになつてしまっていますので、全部カバーするような国際交流委員会を取り扱っています。これは英語科の教員もいますし、理科の教員もいます。

森 そうでないといかんでしょうね。いま

国際交流といつたら英語科というのが引き受けられないかというのはい。

吉川 そんな事では話になりませんね(笑)。先ほどのうちの答申にも、要するに恒久的なプログラムとして動かすには、絶対的に英語科だけではなしに、しかるべき機関が要りますよと提言しているわけですから、絶対そういうふうな機関がないとスムーズには動かないと思いますね。勝手に英語科だけがしているんだとか、それでは話になりませんからね。

森 その辺はいわゆる国際交流に対する教員側の啓発の部分とちがいますかね。そういう(国際交流Ⅱ英語科)感覚がありますからね。

坂田 それは、受け入れるからには十分なこととしてあげないという気持ちがある、受け入れるということを消極的にしているのかも知れません。案外外国なんかでは、かえって放つたらかしかも知れません。

釜田 ここで体験したということだけをね。

坂田 そうそう。だから入るほうは体験するだけでもいいんですよというような人もい

るんですけど、我々はやつぱりそれじゃいかんと、かわいそうだからというようなことでカリキュラム全部含めてやるでしょう。

釜田 それは中高でそういう受け入れをしていただきましたら、いまの長期の客員教授の招聘がもっと進むですよ。ちょうど中学、高校の就学年齢のお子さんを抱えておられる方がね、子供の教育ということで、だいたい断わられるですよ。そういうことで、そういう場があるということになりますと、もっと進みますけどね。

吉川 そうですね、交流の部分、長期的な留学生の受け入れなんかね。大学の客員教授の子供さんをたとえば中高で面倒見るとか、そういうようなことですね。

釜田 同社社には四校あるのですからね。だからどこでもいろいろ、共学がよければ共学、男子校、女子校がよければというふうに、そういう形でできたら、それは樋口先生、だぶ違いますよ。

樋口 それは違うでしょうね。

釜田 いままでも子供さんの教育問題が解決できないためお迎えできなかったような方々もありましたしね。

山口 中高のほうも、少なくとも私の学校では、同社社の本部なり、交流委員会とかいろんなそういうところから、必要なのでくにお願ひしていただいたりしたら、学校内でも受け入れてもらいやすくなると思いますけれどね(笑)。とつてもいいかなと思うんですけど。

釜田 ここを窓口にするというのはあれですね。  
森 交流させればいだろうということはあるのですが、じゃ受け入れるときに、どのように受け入れるかの態勢がないですからね。しかし、あまりきつちりしようと考えたりするのはまじめすぎるのですかね。

坂田 それはまじめとかとということではなく受け入れたからには日本語をきちんと教えるとか、帰るころにはある程度日本語が話せるというぐらゐのことはしてあげないかんでしょうし。

森 英語の時間だけ出席なさいますという風な感じになつてくる。それ以外にあと体育ですとかね。

吉川 そういうようなのも恒久的な機関があれば、プログラムを組んであげて、各教科

にお願いします、この教科でこの時間お願いしますとか、こういうような形で参加してくださいとか、全体的な学校のレベルとして協力お願いできるのと違うかなと思うのですけどね。

樋口 さつきいろんな援助を欲しいということの中に、チューターの話が出ていたのですけども、大学のほうのチューター制度というのは、ものすごく細かく規定してましてうるさいでしょう。ティーチング・アシスタントもうるさいんですよ。大学院の指導教授の何とかなというようなことがあつて。だけど、アメリカの場合はティーチング・アシスタントというのは主婦であれ、だれであれ、その可能性のある人は学校が頼むんですよ。私はそういうふうなところまで広げて欲しいと思うのですね。

釜田 そうですね、もうちょっと考え直さるといかんと思いますね、いまスタート時ですから(笑)、ちよつとまだ枠がね、わかります。

樋口 いまの素案でもそうですね。大学院の学生の奨学金みたいな形でやつてますから。趣旨に反しますから。

釜田 これはまだちょっと改善の余地がありますね。

山口 大学の場合は文部省のチェックが入ったりするからうるさいとかじゃなくて、大学自身の中のことですか？

樋口 いや、それはそうじゃないと思います。チューターとかアシスタントはそうじゃないと思います。

山口 それなら何とかなりそうな気がしますがが中学の場合、なかなか厳しいですし。

森 中高は厳しいですね。教員免許がなかったら頼めないですね。

樋口 ティーチング・アシスタントもそうですか。

森 いや、だから教員免許のある者がその時間教室にいたらいいんですね。

吉川 チームティーチングとか、そういうので可能ですけど。

森 (たとえば男子の家庭科でよく問題になりますけど)、料理学校の先生に家庭科の授業を頼むといったときにだめなのです。授業時間に助手として入ってこられるのはいいんです。家庭科の資格を持った者がその時間いないとだめなのです。だから教員免許の無

い料理学校の先生だけで授業をやるといこうとは教育委員会は絶対認めないんですね。無免許だといって。

釜田 それはそうですね、無免許。TAを活用すると樋口先生がおっしゃったもう少しこれを幅広いものにしたらいいですね。

樋口 TAか、あるいはアシスタントです

ね。  
吉川 だからティーチング・アシスタントの問題も向こうのマニュアルといったらすこいものがちゃんとできていますよね。このぐらい分厚いというか。ということ、そういうのがちゃんと確立しているわけですから。

逆に日本の場合、そのようなものはないし、逆に大学でそういうコースがあつて、海外の文献をちゃんと見て、そのコースとつたものから選んでもらうとか、いくらでも形はあると思うのです。英語の文献、海外で教えるティーチング・アシスタント用とか、全部文献がでていてちゃんとありますからね。それらのコースをとつたものがボランティアのティーチング・アシスタントとして活躍してくれば、これが同志社だよと言っていただければ非常にありがたいというかね。

釜田 それはそうですね。

かなり盛り上がってきたんですけど(笑)、最初私の司会が悪くてぎこちないスタートを私が切ったもので、いまごろちようど盛り上がってきたのですが時間がまいましたので残念ですがここで閉じさせていただきたく存じます。

そういうことで、本日は本当に長時間ありがとうございました。

(一九九四年八月三十一日 新島会館にて収録)